

書 評

漆原和子・藤塚吉浩・松山 洋・大西宏治編『図説 世界の地域問題』

ナカニシヤ出版 2007 174p.

本書は、上記4人の編集者を中心に、45人もの自然地理学から人文地理学までの幅広い分野にわたるそうたる地理学者が、各自の専門分野に立脚して世界の様々な地域問題を論じた論文集であり、社会科教育、地理教育関係の教員などに、地域問題について地理学的に迫るアイデアを、素材とともにコンパクトに示してみようとした地理学普及書である。

ここで取り上げられた地域問題、すなわち一つ一つの課題は、すべて見開き2ページにまとめられ、広範な80の課題が論じられている。取り上げられている課題は、地域問題それ自体を論じた本質論関係が3編、世界全体にわたるものが7編、オセアニア8編、アフリカ8編、ラテンアメリカ7編、アングロアメリカ7編、ヨーロッパ11編、アジア17編、日本14編という9章・総計80編からなり、世界全体に及ぶ地域問題に関わるように構成されている。

また、それらのうちいくつかは北極圏周辺、北アメリカなど大陸をまたいで共通する課題もあげられており、世界・地球スケールの問題が一つの章となっている以外に、各大陸レベルに割り振られた章内では、一つの集落という大縮尺の問題から大陸レベルの問題まで、様々なスケールにみられる地域問題が集められている。

課題の内容も自然現象にみられるメカニズムに重きを置いたものから、人間の頭の中のイメージの問題まで幅広く取り扱われており、学生時代に地理を苦手とし、地理学の多様性と奥深さには気付かなかった他分野出身の社会科教師にも、地理と地理学の幅広さと面白さをアピールできる内容になっていると言えよう。

本書では、まず、編者4人の連名による「世界の地域問題」を論じるなかで、地域問題の定義を

竹内啓一氏による「広義の資源の再配分問題」として受け止め、加えて地理学の重要な側面である自然との関わりを重視して自然現象が作用する人間活動への支障を考慮したとしている。また、これを受けて、「地域問題の発見」では、吉水氏が藤塚氏の研究成果に基づきながら地理学者の「問題」発見のあり方を示し、科学知習得型のイギリスの地理教育と対比しながら地理学習における「地域問題」への地理学的アプローチの視点を論じている。さらに、大西氏は、絶対量の分布図と相対的な分布図(コロプレス地図)を対比しながら、地図から地域問題を読み解くための配慮について考えている。

地理教育というのは結構面倒なものだと筆者は感じている。その理由は、地理学科以外の学生に、地名や産物を教える以外に何が内容であるかイメージし難いようだからである。とくに地域問題については、地理学科の学生にとってもどういった切り口で取り扱うか、他の社会科学との違いが意識できないようである。地理学者が扱う地域事象には、地理学者が直接説明しない定義があるようなのである。上記の関連で言えば、確かに地域問題のかなりが「資源」の再配分問題ではあるが、どうもそれだけではなさそうだし、「再配分問題」のうち社会的な問題の多くは、経済学の問題であったり、社会学の問題であったりする。そのなかで、贅沢な望みなのかも知れないが、地理学者は何を問題視しているのか、その辺が地理学出身以外の教師に伝わるといいのだがなどと思う。

なお、地域の自然環境など、各地域の自然条件との関連性から問題を考える、もしくは問題がそこに根ざしていると考えるといった説明は伝統でもあり、世間的にもうまく伝わっているように思え

る。ここでも自然関係の説明は地理学習らしいと感じるが、案外、人文地理学、社会地理学関係などのところで、地域的条件以外からの説明にどんな考え方があるのかが伝わるとよいのであるが。それは本質論として語る必要もあるかも知れないし、各論の中で様々に例示していくのがよいのかも知れない。教育界で「地理的な見方や考え方」がしばしば主張されながらも、なかなか浸透しない現状を考えると、各論の中で例示していく段階にあるのかも知れない。地理学者は教育用にそのことを意識して説明して下さると教師達に親切となるのではなからうか。それを考えるのは地理教育に関心を持つ櫻井たちがすればよいことと叱られそうであるが、こうしたことを書いてしまうのは、地理学が育ててきた思想のようなものが、どうもうまく教育界に伝わってこなかったのではないかという悩みを筆者は持ち続けており、それを地理学の専門家の皆さんからお教え願いたいからである。

本題に戻ろう。各編では、すなわち各地域問題では、主に自然に関する例で言えば、自然地理学者が地域問題を描いているだけに単に危機を声高に言うことなく、プロセスの特色をその地域の条件に照らしながら説明している点に特色があり、普通のジャーナリズムの提供情報とは際だって異なっており、つつい新聞記事程度の知識しかない筆者にとっては、非常にありがたく、刺激的であった。同時に、自然地理学者のこれほど多くの方々が、環境問題、地域問題に深い関心をお持ちいただいている現状にあらためて気付いた。自然地理学関係者とつつい距離を置きがちであったが、自然地理学者の科学者の目は、まさに地理学者の目でもあったのかと安心した。

人文地理学に関わる人文社会現象を含めて考えてみても、各地域の自然条件との関連の説明は特色を持ち、近年の経済至上主義に対抗するかのよう、問題地域のもつ可能性や将来性に付いても言及し、我々日本人が文化として学ぶべき点などについても触れられており、世界の低開発地域の学習で陥りがちな見下すような姿勢に対し、現地

の人々や文化に対する温かな目が配慮されているように感じられ、こうした好感を持てる記述が随所に見られる。

これら将来への予測や警告、提言といった点、すなわち研究は客観的であるべきとする地理学者の科学主義のために避けられがちであった論点にまで踏み込んで記述がなされ、またそれが編集方針でも奨励されており、社会科、地理歴史科・公民科教育において近年重要視されようとしている社会参画への配慮がなされているとも言えるのは興味深い。

本書の特色の重要な一つが書名中の「図説」に示される地図化して地域問題を説明しようとする積極的な取り組みである。また、説明のためにモデル図も多用されており、理解を助けてくれる。

図版を含めて見開き2ページのなかで問題を論じたため、どうしても説明不足があるかも知れないと編者達が前もってお詫びを言っているが、広範な話題それぞれに参考文献もあげられている。これらをヒントにすれば、内容を充実させて授業の柱となる教材作りを試みるのが可能である。

また、その引用の多くが地理学者の著作物、しばしば著者自身の著作になっているのが嬉しい。地理学者の多くは控えめで遠慮深過ぎて、自分の著作を教育用にまで売り込んでくれなかった。地理学者が考えたことを是非積極的に教育用にももっともっと売り込んで欲しい気がする。

また、一般教員には収集できないことも多い資料を、現地地理学者の著作から引用したり、そこで利用された図表を示しているのも有り難い。こうした現地地理学者による資料では、見開きという枠以上にしていただけたらもっと参考にしやすくなるかもしれない。とはいえ、本書の第一の目的は、地理学者が関心を持つ地域問題の多様性を紹介することであり、これをきっかけに中・高の社会科関係教員が刺激を受けてくれることであろうから、ちょっと短すぎるなどという贅沢は言えないし、本書の目的は十分に満足され、多くの教師の実践へのヒントになるであろう。

地理学関係学界で今まさに活発にご活躍中のそ

うそうたる研究者達がこれだけ多数集まり、これだけ多様で示唆に富んだ話題を提供して下さったことに、関係諸学会の地理学者達の教育に対する積極的な取り組みが読みとれ、教育に関わりなが

ら教師達と専門家との交流に危惧を抱いてきた筆者は、自らの努力不足を反省しつつ、こうした試みが様々な形で実を結ぶように祈っている。

(櫻井明久：駒澤大学)

David W.S. Wong and Jay Lee: *Statistical Analysis of Geographic Information with ArcView GIS and ArcGIS*

(デビッド・W.S. ウォン, ジェイ・リー『ArcView GISとArcGISを用いた地理情報の統計解析』)

Hoboken: John Wiley and Sons, 2005, xvii+441 p.

2005年の金額ベースによる日本国内のGISパッケージ・ソフトウェア市場において、ESRIジャパンは22.0%と最大のシェアを有し(富士キメラ総研編 2006)、同社の主力商品であるGISパッケージ・ソフトウェアArcGISは、大学の地理学関連学科・専攻のGIS関連の授業において最も多く採用されている(佐々木ほか 2006)。また、総務省統計局「統計GISプラザ」や、国土交通省「国土数値情報ダウンロードサービス」といった、2000年代に入って開設された官公庁のホームページから無償で入手できる空間データも、ArcGISをはじめとするESRI社製品で採用されているシェープ・ファイル形式(.shp)となっており、いわばGISの標準となっている。そのこともあって、最近では佐土原ほか(2005)や高橋ほか(2005)といったArcGISの入門書が相次いで刊行されている。

本書は入門者向けというよりも、ArcGIS やその前身のArcView GISの基本的な操作を会得している者を対象としており、最も普及したGISパッケージ・ソフトウェアですぐに使える統計解析・空間解析ツールやその演習用データを配布することで、空間解析や統計の概念を読者に理解してもらうことを目的としている。それは、空間解析機能がGISの特長であるにもかかわらず、これまで空間解析と空間統計学の使用に対する支援が不十分であったという筆者らの問題意識に因っており、こうした筆者らのねらいは、2001年に刊行さ

れたLee and Wong (2001; 以降、旧版と略称)から引き継がれている。

その新版にあたる本書は、8つの章から構成されている。第1章イントロダクションでは、はじめに統計学と地理学との関係や科学的推測のためのサンプリング、可変単位地区問題や空間的自己相関といった空間データの特性などについて概説される。その上で、空間解析や統計学の基礎として、測定尺度や階乗、総和、総乗といった数学的概念と、縮尺や投影といった地図に関する概念が説明される。

第2章から第4章は、第1部として古典的統計学に関してまとめられている。第2章では、中心代表値や散布度、尖度や歪度といった基本統計量について、第3章は相関分析や単回帰分析といった2変量(2変数)の関係について説明される。第4章では仮説検定についてまとめられ、確率の概念にはじまり、二項分布や正規分布といった確率分布、母平均の差の t 検定などのパラメトリック検定や、 χ^2 検定などのノンパラメトリック検定について解説される。

第2部は第5章から第8章で構成され、空間統計学に関する内容である。第5章と第6章では点、第7章では線、第8章では面に関する空間分析について、それぞれ解説される。第5章では重心や散布度、方向といったセントログラフィ統計量について、第6章では、方格法や最近隣法、 K